

月に戦争重犯罪者として、なお大将は従容として絞首刑に服された。第一次の慰霊行きの時はまだ土饅頭の墓所で、傍らにマンゴウの木が半ば腐つてあつた。その次の訪問時には無かつた。

山下奉文 辞世の一首

待てしばし 勲のこして 逝きし友

あとなしたいて 我れも行きなむ

本間中将は軍人としての処刑で、同年四月に山下大将の墓所から五〇メートル程の地で銃殺刑でした。墓地も直径五メートル位の円座の中央に碑が建つていた。さらに南進し、サンタクルスのお前に「カリラヤ霊園」と命名した政府樹立の「全比律賓戦線戦没者五一万余柱霊位」があり、霊位泰かれとの建碑でした。

以上戦跡巡拝、全六度の足跡を簡略に記しました。ただ二度と戦争の無きを念じます。私たちの国、私たちの地球です。

国の為 呂宋に散りし 同胞の

霊泰かれと 泪で拝す 八十路の爺

米軍反攻下の

フィリピン戦線の衛生兵

東京都 福原良忠

私は大正七（一九一八）年十一月五日、男四人女二人の六人兄弟の三男として現在の東京都墨田区東駒形で生まれました。

徴兵検査は、昭和十三（一九三八）年六月に当時の本所区役所で受けましたが、第一乙種合格ということでした。第一補充兵となりました。しかし第一補充兵でしたが、成人に達する頃、既に中国大陸に戦火が拡大中で、早晚兵隊に行かねばならないと覚悟をしておりました。

早くも翌年の昭和十四年十二月十日、臨時召集で世田谷の野砲第一連隊に入隊となり、衛生兵要員として翌年の一月十二日付で臨時第一陸軍病院

に配属されました。そして四月一日には、同臨時第一陸軍病院の第七内科勤務を命ぜられました。

昭和十五年九月一日、選抜で一等兵に進級、昭和十七年十一月二十五日、召集解除で除隊となりました。この間、昭和十五年五月二十日には、紀元二六〇〇年祭を記念して、臨時召集兵のみに与えられた「支那事変従軍記章」を受けました。以上が私の第一回の軍隊勤務でした。

フィリピン戦線の労苦体験

昭和十六年十二月、大東亜戦争が勃発しました。そして第二回目の召集を受け、東京第一陸軍病院に入隊となりましたのは昭和十九年八月三日でした。

九月五日、東京第一陸軍病院内で第一二九兵站病院が編成されてフィリピンへ進出することとなり、十月十二日午後三時に東京駅を出発したのですが、その前日、戸山学校校庭において出陣式が

挙行されました。第一二九兵站病院は別名「威三八八九部隊」と称されました。

東京から門司に着いたのは翌十三日、それから十一月二日まで門司で待機となり、門司を出港したのは十一月三日、日本郵船の「日洋丸」(二四〇〇トン)に乗船しました。

途中台湾の基隆に寄港後高雄に上陸、約四日間、鳳山街の小学校に滞在後、十一月二十五日、当時既に米潜水艦が出没して魔の海峡と言われていたバシー海峡を無事通過しました。二十八日にはアバリ沖に到着、停泊後、翌日北サンフェルナンドに入港、マニラ上陸したのは十二月一日午前十時でした。直ちにマニラ市サンタメサ兵站宿舎に入りましたが、次いで十四日北部ルソンに向かつてマニラを出発しました。

十二月十五日の深夜、ダモルテス駅に着きました。私がいた義沢部隊員の中には教育の済んだ兵隊は少なく、三十五歳くらいの補充兵が多く、部隊の重い梱包物を運ぶのは大変でした。

目的地のアルタチオまでロザリオから約八キロ位、アルタチオに十二月十八日到着、アルタチ病院に入りました。アルタチオでは三十軒位の部落と学校などを利用して第一二九兵站病院となりました。

ここで少し落ち着きましたので、先の十二月十四日マニラ駅北部ルソンのダモルテスにて受けていた上等兵進級を中隊長に申告しました。

昭和二十年一月三日、榎本中尉にボソルビオに派遣命令が出て、班長の出口伍長と一緒に行くことになっていたのですが、いざ出発という時に、出口伍長がマラリア発熱が起き、交代の者が得られないので、私が先任者として他の者十人を連れ出発しました。

一月五日、マニラ方面から前線の患者六人が送り込まれてきました。そして一月八日の朝、昨日までいたボーイの姿が見えないのです。

この一月五日、米軍の反攻が始まった時で、か

つて緒戦に日本軍がフィリピンに上陸した遠浅で白砂松緑のリングエン湾には数百隻の米艦船が集結し、一月八日、九日にかけて上陸する米軍の事前掩護として猛烈な艦砲射撃と空爆が行われました。この米軍の反攻の空爆では、私たちの宿舎の一部に爆弾が当たって、私ども三人が地上に叩きつけられました。先のボーイも米軍が来たといつて逃亡したのです。

この米軍の反攻は四日間続いて、私たちは榎本中尉と共にそこを引き揚げることとして、カルマタ車一台に荷物を積んで、まるで、しかし本当に敗残兵の姿で、命からがらアルタチオに向かつて逃げたことを覚えております。

しかしアルタチオに着いたのですが、本隊は既にバギオに向かつて行動を開始しており、そこには一部の班が残っている程度でした。私も元の班に戻ってバギオに向かうこととなりました。この間、ナギリアン道路、ベンゲット道路には四つのキャンプがあり、キャンプIには一月七日から八

日、キャンプⅡには一月八日から二十九日、キャンプⅣには一月三十日から二月四日、キャンプⅥには二月四日から三月九日、とバギオまでは三カ月ほど掛かりました。

この間、班長の志村曹長死亡、戦友も数人病死し、このバギオまでの三カ月はとても辛い三カ月でした。ようやくバギオに着きました。穴蔵に四、五人が入って兵舎まで食事を取りに行く。バギオの山は松林で夜はとても寒い。病舎には患者が二百人位いて、このバギオも毎日の空爆で退去を強いられるようになってきました。

私もマラリア熱で、かつてマツカーサー大将の別荘「白雲荘」の殿堂に、自分の隊の患者十七人と共に入りました。四月二十四日頃、病院本隊は退去した、とのことを看護婦が知らせてくれました。私たちには何日か前に食料少々と手榴弾をくれました。私たちは捨てられたことを知ったのです。私は「私たち全員はこのまま死んではだめだ」と大声で言って、すぐ出発することにしたの

ですが、歩行ができない者も多い。山を下るのは私自身でも苦しいほどでした。

途中で山を下ってくる中西上等兵と会いました。「トラックで十二キロ先の地点まで行くから乗って行け」と言われ、私と三人ぐらいトラックに乗せて貰いました。後の人のことは分かりません。十二キロ先には旭兵团（第二十三師団）の患者と自分の隊の藤田士官がいました。

泉村へ患者と共に早く行け、と言われ、四月初めに着きました。穴原少尉の内科班に入りました。そして私も元気になって毎日勤務を続け、四月末頃には患者のことで義沢隊長以下士官三人とトリングダット分院に出張しました。

その時、山間で空爆を受け、隊長ほか士官は無事でしたが、私と三人は二メートル近くに直爆を受け、私は戦友の血を全身に受けましたが、私は奇跡的に無事でした。私は一カ所に落ち着くこともなく、死亡者確認とか何かと出張が多かったのですが、この泉村で兵長に進級していたことも知

らずに行動していました。

この頃、私は兵長に進級していたのだそうですが、それも知らずに上等兵のまま行動をしていたのです。

穴原隊とは別に、出口伍長、旭兵団の患者六人で、本隊のいる方向に進んでいるだけでした。これから「一ノ谷」「二ノ谷」「三ノ谷」を渡り、地名も分らない山の中のカヤバ峠の検問所に着いたのは七月中ごろでした。穴原少尉のところには誰もいませんでしたので、それからは私と二人で天幕で過ごしました。

八月末頃、本隊の兵隊とも会うようになりました。九月になった頃、村山曹長と会いました。私の二年先の衛生兵です。「元氣だったか、福原」と言って喜んでくれました。その時初めて終戦を知りました。

そしてまた、命令が出ましてキャンガンまでの患者と死者の確認に小林士官と共に行動しまし

た。九月中頃、そのキャンガンで武装解除を受けました。そして本隊の熊本大尉の下に入り、米軍の収容所に向かうことになりました。そして名古屋港に帰還し、第二回の召集解除、復員となったのは昭和二十一年十二月のことです。

こうして米軍反攻開始のフィリピン戦線に投入され、そして主として逃避に終始した私の戦いは終了しました。

第一二九兵站病院の戦友は「一福会」を結成、文集を刊行して、往時の労苦を偲び、亡き戦友の冥福を祈っています。

バタンガス収容所の「笑南劇団」

昭和二十年十月二十五日頃、私たち約百人が第一陣としてバタンガス米軍収容所に入所しました。この収容所・キャンプは「バタンガス第一A」と言われ、ここで私たちのPW生活が始まったのです。一カ月半位は道路の修理の仕事が多かったが、各班によっては米軍キャンプまたは

フィリピン軍のキャンプの仕事に行くようになり
ました。十二月の中ごろになると収容所も増えて
きてキャンプNo.1からキャンプNo.6までに増えて
いったと思います。

収容所キャンプ生活は、体力がなく、仕事が辛
く、また食料も少ないため不平や不満が鬱積して
きて、人々の間で種々のいさかや争いが始まる
ようになって来ました。そこで中隊長や小隊長な
どが秩序の乱れに困りだし、もし何らかの事故が
起きたら米軍の収容所長に申し訳ない、との考え
も出だして、各班でも何とかしたいとの課題とな
りつつあったのです。

私は第一回の召集での軍隊生活で何回となく演
芸会を催し、出演した体験があったのです。腹が
減ったり疲れたりして、心に冷静さを失った時、
面白い話や食物の話を書くことによって、腹を立
てなくなり、いさかやいさかやもなくなると思いまして、
私がさし出して各班長に演芸会などをやってはと
いうことを話にいきました。

中隊長も、この話を受け入れてくねまして「演
芸部のことは君に任せろ」ということになりまし
た。

それからは土曜日の仕事が終わった六時四十分
頃より「演芸部」のことで打合せを始めました。
最初の頃は三十人位集まってくれましたが、だん
だん話を進めて行く間に次第に具体的な盛り上げ
りを見せ、芝居をやるとういうことになりました。
た。そして希望者も四十人位集まりましたので、
中隊長に「全員の喜ぶことになるならば、慰めに
なり心もなごむのではないか」と申し上げたところ、
中隊長が山田通訳を連れて米収容所長に願
い出ることになりました。その結果「OK」と心良
く許可を受けることができたのです。

言い出した私ですが、私にとっても大仕事で、
それからは大変忙しい日々が続くこととなりまし
た。私は演劇は根から好きなことでしたので、こ
れによって故郷へ還るまでの収容者の心がなご
み、和気が出るようにと、二人の書記が付いてく

れまして、台本を書き上げました。

芝居は当然、望郷であり、そして日本の芝居でした。題名は「杵掛時次郎」「大利根月夜」「一本刀土俵入」「権三と助十」「人生劇場」「番場の忠太郎」「文七元結」「湯島の白梅」その他です。語り物では落語とか東京代表浅草より「吉原情話廓日記」など、私が芝居の始まる前の三十分位語りました。

そして劇場名には、私が芸名を「笑南」と言われていましたので「笑南劇場」としました。また道具方、裏方としてはメーカーキャップ、衣装、小屋造り、その他の係を設け、大勢の方のお力を頂いて開催することができました。

この演芸会は十一月の末頃まで催し、収容所全員の方々に楽しんで貰えたと思います。そして当初の目的であった収容所の雰囲気もなごんで来たと思います。このような暮舎生活の中の楽しみも、十二月十日頃までには演芸会の小屋も撤去することになりました。これには日本へ還ることが

できるといふ嬉しさが伴っていたのですが、一方では、楽しんで来たボタンガスを去る淋しさもあり、複雑な心境になりました。

いよいよ日本へ還ることとなり、乗船のため我々が船着場に集まった時、過ぎた戦場のことや戦病死された戦友のことや、爆撃、砲撃で逃げ回ったりした苦労が思い出されて、知らず知らずに目に涙が流れて来ました。昭和二十一年十二月十八日のことです。

復員船、米リバティ船に乗り込む時には、見送りに来てくれた数人の米兵やフィリピンの人達が、手を振って別れを惜しんでくれた姿が嬉しく、いつまでも心に残ったものです。

激戦のあったフィリピンの山々、マニラの街の風景、まだ山野に残っているであろう幾多の戦友の御霊に遙かに黙禱を捧げました。そしてかつて「魔のバシー海峡」と呼ばれた海峡も静かに通過、約一週間の航海の末、十二月二十六日、名古屋港

に上陸しました。昭和十九年十一月、フィリピンに向かつて門司港を出発以来約二年、夢のような思いでした。

戦前の名古屋港は知りませんが、上陸して見る風景は、工場や家屋は焼跡となり、話には聞いていた以上に酷しい戦災の傷跡を示していました。これからの日本の復興と生きて生活してゆくのは大変なことだなあと思いました。

名古屋港では復員局で復員の手続を済ませましたが、この復員局で伍長になりました。また復員局の別の部屋に全国の家族からの手紙が山のように積まれていました。嬉しいことに、その中に妻からの一通の手紙がありました。それによって私の帰るところが分かったのです。十二月三十日、葛飾区亀有の妻の実家に着き、私の二回にわたる長い軍隊生活は終止符を打ったのです。

【解説】

昭和十九年、第二回目の召集、比島方面軍の

「威三八八九部隊」(第一二九兵站病院)。

昭和十九年十一月三日、門司を出帆、十一月二十五日、魔のバシー海峡通過。十二月一日、マニラ、北部ルソンに向けマニラを出発。十二月十五日の深夜、ダモルテス駅着。同月十八日、アルタチ病院入(部落、学校など利用、第一二九兵站病院とす)。

昭和二十年一月三日、ポソルビオ派遣の命令を受け、先任者として十人を連れ出発。

一月五日ころより、米軍の反攻が始まる。リンガエン湾には数百隻の米艦船の集結を見る。八日、九日、米軍の猛烈な艦砲射撃と空爆。我が宿舎にも爆弾が当たり、我々三人が地上に叩きつけられた。米軍の反攻は四日間続く。命からがらカルマタ車一台に荷物を積み、アルタチオに向かい逃げる。

しかし本隊はバギオに向かい行動開始中にて、我々もバギオへ。バギオまで三カ月かかる。この間、志村曹長死亡、戦友数人も病死。

バギオの穴倉に四、五人で入る。病舎には患者が二百人位いたが、バギオも毎日の空爆で退去を強いられる。私もマリアアにかかる。

四月二十四日頃、病院本隊は退去。私たちには何日か前に食料少々と手榴弾をくれた。私たちは捨てられたことを知ったが、私は「私たち全員はこのまま死んではだめだ」と大声で言つて山を下った。歩行できぬ者も多い。私自身も苦しかった。

途中、中西上等兵と会い、トラックで十二キロ先には旭兵団(第二十三師団)の患者と我が隊の藤田士官がいた。

「泉村へ患者と共に早く行け」と言われ、四月初めに着き、私も元気になり、四月末頃には患者のことで義沢隊長以下士官三人とトリンダット分院に出張。山間で空爆を受け、私と三人は二メートル近くに直爆を受け、戦友の血を全身に受ける。

地名も分からぬ山の中、カヤバ峠の検問所着は

七月中旬、八月、本隊の兵隊とも会うようになり、九月、初めて終戦を知る。

キヤンガンまでの患者と死者の確認、そのキヤンガンで武装解除を受けた。召集解除、復員は昭和二十一年十二月(名古屋)。

かくの如く、米軍反攻開始のフィリピン戦線に投入され、主として患者と共に避難に終始し、私の戦いは終了した。